

読書の楽しさとは

—図書館祭り、家族読書から—

校長 土屋 美之

「そのころ、東京中の町という町、家という家では、二人以上の人が顔をあわせさえすれば、まるでお天気の良いさつでもするように、怪人二十面相の噂をしていました。・・・」

これは怪人二十面相のはしがきの一部です。当時小学生だった土屋少年は、『怪人二十面相』や『少年探偵団』など、江戸川乱歩シリーズにはまっていました。今では学校の図書館では見なくなったので、子どもたちに聞いても「???」となるのですが、私と同世代の人ならば「覚えている」と言ってもらえるのではないのでしょうか。江戸川乱歩シリーズは怪奇、幻想を前面に押し出した突飛な作風と、本格的なトリックを駆使した推理小説で、大正・昭和期では人気のある作品です。当時を思い返してみると、推理することに楽しさを感じたのかもしれない。



家族にも小学校時代にはまった本やシリーズがないか聞いてみました。妻は『赤毛のアン』シリーズ全7巻でした。長男はミハエルエンデの『モモ』、『ズッコケ3人組』シリーズも好きだったと言っていました。長女は偉人や伝記シリーズ、『しずくちゃん』や『かいけつゾロリ』シリーズもはまっていたようです。ちなみに、長女が友達に聞いてみたところ、『ミッケ』、『100階建ての家』、『カラスのパン屋さん』、『グレッグのダメ日記』と教えてくれたそうです。好みは人によって実に様々です。この学校報をお読みになっている皆さんは、どんな本がお好きだったでしょうか？あるいは今、どんな本に興味を持ち、はまっていらっしゃるのでしょうか？

本校では年に2回、梅雨時と秋に家族読書を位置づけています。今秋は11月25日(月)から12月2日(月)の1週間です。保護者の方におかれましては、大変お忙しい中、ご協力いただき誠にありがとうございます。読書は読解力や知識が身につくということだけでなく、論理的な思考や集中力などの力もつきます。また、自分が知らない世界の扉を開けてくれたり、ワクワクさせてくれたりと、様々な良さがあります。読書週間では、その良さを保護者と子どもが共有することができます。

一方で世間では読書離れが進んでいるようです。ある調査(小4~高3)によると、平日(1日当たり)の読書時間は全体の49%が「読書はしない=0分」。次に多いのは「30分」。また、学年別では学年が上がるにつれて0分が増加しているそうです。小1の読書時間は「14.5分」ですが、その後徐々に増加し小6の「19.2分」でピークを迎え、その後は減少が続き、高3では「平均11.6分」まで減少したそうです。そして、蔵書数が多い、親が読書を勧めている等の家庭ほど、子どもの読書時間は長かったとの結果でした。自分や我が子のことを思い出してみても、中、高と進むにつれて、確かに読書量は減っていたと思います。さらに「読書時間の経年変化」を見ると、もともと小1時点で読書時間が長い子は、その後も継続して多く読書することも分かったそうです。

どんな本を子どもと読もう？そういう楽しさもあります。今後、自分の人生を広げる意味でも、お子さんと一緒に楽しみながら読書していただけたらと思います。